

L2024-1

2024 年度

市川中学校 第 1 回 入学試験問題

国 語

50分 100点満点

2024 年 1 月 20 日^{じっし}実施

【注意事項^{じこ}】

1. 監督者^{かんとく}の指示に従い、本冊子より解答用紙を取り出し、冊子を閉じた後、試験開始のチャイムが鳴るまで、冊子の中を開いて見ないこと。
2. 取り出した解答用紙に受験番号シールを貼^はり、裏返し^はの状態にした後、解答用紙の上に問題冊子を置くこと。
3. 試験開始後、解答用紙に受験番号、氏名を記入すること。
4. 試験終了^{しゅうりょう}のチャイムが鳴ったらすぐに筆記用具を置き、解答用紙を裏返し^はの状態にすること。
5. チャイムが鳴っている間に記入した解答は、無効にすることがある。
6. 問題冊子は各自で持ち帰り、解答用紙は必ず提出すること。
7. 答えはすべて「解答らん」に書き入れること。
8. 解答の際には、句読点や記号は1字と数えること。
9. コンパス・定規は使用しないこと。

【文章I】 次の「文章I」は、江原由美子・山田昌弘『ジェンダーの社会学入門』の一部である。これを読んで、後の問いに答えなさい。なお、出題に際して、本文には省略および表記を一部変えたところがある。また各段落の冒頭に①～⑦の番号を入れている。

【文章I】

①女性の経済的・社会的自立を一つの目標として※第二波フェミニズム運動が展開されると、すぐに女性たちは、1もつとも大きな問題を自分自身の内部に見出すことになった。男性と同じように経済的に自立し自分自身の意志で生きることが強く望んでいる女性の多くも、心のどこかで自立することに躊躇（ちゅうちゆ）してしまっている自分があることを発見したのだ。

②女性が自立を前に躊躇（ちゅうちゆ）してしまっている理由の一つは、女性の自立を阻む様々な社会構造があるゆえである。女性であるからという理由で十分な教育を受けさせてもらえず、職業能力も不十分であり、その上職業世界では性差別が厳然と存在しているとなれば、経済的自立の困難さを前に呆然（ぼうぜん）としてしまっても当然とすらいつてよい。けれども女性たちは、こうした社会構造だけでは説明できない、自分自身の心の動き自体に潜（ひそ）む「自立への躊躇（ちゅうちゆ）」をも発見した。十分に能力があり成功を期待された女性でも、自分に自信を持てていない。あるいは成功してしまうと、誰（だれ）からでも好かれないのではないかと不安になる。結婚（けっこん）するとたちどころに男性を頼（たよ）ってしまふ。常に男性よりも、一歩下がっていようとする。責任を負うことがこわい……。こうした心の動きは、「依存心（いそんしん）・依頼心（いらいしん）」「ひかえめ・おとなしさ」など、これまで社会が「女らしさ」として規定してきたことそのものであった。「女らしさ」は、女性たちの「自立」を阻むもう一つの「問題」となったのである。

③※「人は女に生まれない。2女になるのだ」（ボーヴォワール）。ならば、どうして多くの女性が「女らしさ」を身につけてしまふのかということこそ問題となってくる。

④このような問いに対しては従来、「性役割（gender role）」という概念（がいねん）を用いた説明がなされてきた。性役割とは、もつと

も広義には、「性別を理由に割りふられた一連の性格と態度と行為（こうい）の類型」を意味する。この性役割概念を使用するならば、社会は「女」あるいは「男」にそれぞれ「一連の性格と態度と行為の類型」を割りふっており、社会成員は自己の性別の認知にしたがって、割りふられた「一連の性格と態度と行為の類型」を学習していく結果、「女らしさ」「男らしさ」を身につけていくと説明されることになる。

…〈中略〉…

⑤「3女らしさ」として挙げられる特徴（とくちょう）にはどのようなものがあるのだろうか。

⑥表3-1は、※パーソナリティの男性性・女性性を測定する代表的な心理テストの一部である。ここで女性性を示す特性と考えられている項目には、「従順」「はにかみ屋」「情愛細やか」「おだてにのる」「思いやりがある」「人の気持ちを汲（くみ）んで理解する」「優しい」「だまされやすい」「純真」「子ども好き」などがある。これらの項目は、現代社会において「女らしさ」として挙げられているパーソナリティ特性であるといつてよいだろう。また「女らしさ」と考えられている特徴には、パーソナリティ以外に、「背が低い」「華奢（きゃしゃ）」「可愛い（かわい）」「体の線が丸みをおびている」などの外見的特徴や、「筋力が弱い」「瞬発力（しゅんぱつりき）は劣るが持久力はある」などの身体的能力上の特徴、「語学が得意」「理系科目が苦手」などの能力上の特徴などが挙げられる場合もある。

⑦これらの様々な「女らしさ」を考える際に留意すべき第一の点は、現実の個々の女性の多くが、これらの「女らしさ」とは一致（いち）しない特徴を備えているということである。「従順」でない女性も多くいるし、「背が高い」女性もいる。「筋力がある」女性もいるし、「理系科目が得意」な女性もいる。つまり先に挙げた「女らしさ」とは、あくまで、「多くの女性は……だ」とか「女性はどちらかといえば……のことが多い」など、女性を集団としてみた場合の、女性集団と男性集団の集団としての特徴を、挙げているにすぎない。つまり、上記に挙げた様々な「女らしさ」を全て備えた女性は、単にイメージの中に存在するにすぎず、現実にはほとんどいないのである。

⑩表 3-1を再度みてみよう。ここに挙げられている女性性項目は、大きく二つのグループに分けられるように思われる。一つのグループは、「情愛細やかな」「同情的な」「困っている人への思いやりがある」「人の気持ちを汲んで理解する」「あわれみ深い」などを中核とするグループである。こうした項目を並べ、重ね合わせていくと、優しく情愛に溢れて人の世話や手助けをしないではいられない女性像が描かれてくる。もう一つのグループは、「従順な」「おだてにのる」「忠実な」「だまされやすい」「子どものように純真な」などの項目を中核とするグループである。これらの項目を並べ、重ね合わせていくと、子どものように可愛いが知恵がなく愚かで、忠実で従順に人に従うだけという女性像が描かれてくる。

ろうか。

⑩ではこのような「規範」としての「女らしさ」は、※先に定義した狭義の性役割と、どのような関連性を持っているのだろうか。

⑧第二に、単に個々の女性が「女らしさ」と考えられていることに一致しない場合が多いだけでなく、女性集団の特徴とすることもできないような特徴が「女らしさ」として挙げられている場合も多いということにも留意するべきである。パーソナリティにおける「女性性／男性性」を計るテストにおいては、「男性の方が男らしく、女性の方が女らしい」とは必ずしもいえないという結果が出ている。パーソナリティや精神的 능력における性差は、社会通念において信じられているものよりもずっと少ないのだ。運動能力や体力の性差はある程度存在すると考えるのが妥当であるが、訓練によって変化する場合も多く、現在存在すると考えられている性差が不変なのかどうかに関しては注意が必要である。

⑨これらのことを考慮すると、私たちの社会において「女らしさ」と考えられていることは、現実の女性たちから経験的に導かれた「事実」としての「女らしさ」から構成されているというよりむしろ、現実の女性たちがどのような特徴を持っているかということとは関わりなく構築された「あるべき女性像」、すなわち理念型としての「女性」を示していると考えた方が適切だということが分かる。つまり上記に挙げられた「従順」などの「女らしさ」は、「女は従順である」という「事実」を意味しているというよりも、「女ならば従順であるべきだ」という「規範」を意味していると、考えられるのである。

表 3-1

男性性スケール	女性性スケール
自分の判断や能力を信じている	従順な
自分の信念を曲げない	明るい
独立心がある	はにかみ屋の
スポーツマンタイプの	情愛細やかな
自己主張的な	おだてにのる
個性が強い	忠実な
自分の意見を押し通す力がある	女性的な
分析的な	同情的な
リーダーとしての能力を備えている	困っている人への思いやりがある
危険を冒すことをいとわない	人の気持ちを汲んで理解する
意思決定がすみやかにできる	あわれみ深い
人に頼らないで生きていけると思っている	傷ついた心をすすんで慰める
支配的な	話し方がやさしくておだやかな
男性的な	心が温かい
はっきりした態度がとれる	優しい
積極的な	だまされやすい
リーダーとして行動する	子どものように純真な
個人主義的な	ことば使いのていねいな
競争心のある	子ども好きな
野心的な	温和な

注) Bem Sex Role Inventory テストの日本語版。意識調査において、「男らしさ」「女らしさ」と評価された特性を挙げている。

…(中略)…

⑫しかし、この二つの「女らしさ」を同時に持つことは、なかなか難しい。なぜなら「人の世話をする」ということは、自分の欲求を後回しにできる成熟性や他者のニーズを的確に把握できる聡明性など、「可愛く愚か」というパーソナリティとは両立しがたい特性を要請するからである。

⑬しかもこの二つの「女らしさ」はいずれも、「仕事の上での有能さ」や「リーダーとして他者から信頼される能力」とは異なっている。「競争心」や「野心的」などの、仕事の意欲に関わる特性は、「男らしさ」の項目に挙げられている。「分析的」であったり、「自分の判断や能力を信じて」行動する力も「男らしさ」ということであるなら、「女らしい」ということは、そうした能力に欠けるということになってしまいがちである。つまり、男性は「仕事の上で認められたい」と努力するとそのまま「男らしく」なれるが、女性は「仕事の上で認められたい」と努力すると「男らしく」なってしまう、つまり「女らしさ」に反することになってしまうのだ。「女らしさ」は、仕事の上で評価されることと矛盾するのである。

⑭このように、現代社会における「女らしさ」は、その内部に矛盾を抱え込んでいるだけでなく、現代日本の社会成員の多くが置かれている状況(すなわち職業上高い評価を得なければ生きていきにくいという状況)とも矛盾する項目構成を含んでいる。表3-1で挙げた「女らしさ」が問題になってしまう状況とは、けっして女性という性別を持つこと自体から生まれるのではなく、現代社会における「女らしさ」が矛盾をはらんだ項目からなっており、その一部を実現しようとする他と両立がたくなって不安を感じてしまったり、経済的に自立しようとする「女らしくない」と否定されてしまったりすることから生じてきたと考えることができるのである。

⑮ではなぜ「女らしさ」は、その内容において矛盾するような構成要素を含んでいるのだろうか。現代社会における「女らしさ」は、「事実」というよりも「規範」として維持されていることなどを考えあわせていくと、現代社会において「女らしさ」とは、男性にとつて都合が良い女性像を示したものののではないかということがみえてくる。この視点からみた場合、「女らし

さ」と「男らしさ」、「女」と「男」とは、けっして対称的な位置にはなく、非対称的だということになる。

⑯「女らしさ」や「男らしさ」についての知識や信念は文化の一部としてある。これまでこうした文化を作ってきたのは、基本的に男性であった。このことは、⁴言語における「女」と「男」というカテゴリーの非対称性においてもみてとることができる。

⑰「女性」と「男性」は一見対称的なカテゴリーにみえる。しかし実のところ、言語の中では、「人間Ⅱ男性」規則を持つ言語が多いことが知られている。英語においては、*man* という単語は、男性と訳すことも人間と訳すこともできる。これが「人間Ⅱ男性」規則である。人間を指す場合は男性で代用することができるが、女性を人間一般の意味で使用することは文法違反なのである。同様のことは日本語においても指摘できる。「少年」は男の子を意味することも、性別を問わない若い人間一般を意味することもできるが、「少女」という言葉はその意味で使用することができない。こうした規則は一見単に文法規則にすぎないように思える。しかしこうした規則が不便さを指摘されないまま妥当してきた背景には、文化や規範の語り手も聞き手も男性であること、すなわち「何が文化か」を定義する者が無意識的に自分の性別を前提としてきており、「人間Ⅱ男性Ⅱ我々」という前提で語ってきたことが、あると思われる。こうした前提があるならば、「女性は男でないから人間ではない、つまり我々ではない」ことになってしまう。このように、人間Ⅱ男性中心主義を前提とした文化において定義される「女」とは、人間ではない「他者」となってしまっているのである。

※第二波フェミニズム運動：一九六〇年代～一九七〇年代初めに世界に広がった、女性に対する差別や不平等をなくしようとする女性解放運動のこと。

※「人は女に生まれない。女になるのだ」(ボーヴォワール)：20世紀後半に女性解放運動に貢献したフランスの哲学者

シモーヌ・ド・ボーヴォワールの言葉。

※パーソナリティ：人間の個性や人柄のこと。

※先に定義した狭義の性役割：〈中略〉部分で述べられている男性・女性の性の違いちがに基づいた具体的な役割分担のこと。「夫は外で働き、妻は家事を行う」などを指す。

問1 ―線1「もっとも大きな問題」とあるが、それはどのような「問題」か。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 女性が経済的な自立を目指しても、女性であることから十分な教育を受けられず必要な能力を得られないだけでなく、女性の就ける職業が限られている状況では、自立をためらってしまうという問題。

イ 女性の自立を阻む社会構造があるだけでなく、女性自身が職業上で高い評価を得て自立を目指しても「女らしさ」のない女性として否定されるため、自立を躊躇ためらしてしまうという問題。

ウ 女性の社会的な自立を阻む仕組みが多いだけでなく、女性自身が自立を目指しても「女らしさ」の中にそれを阻む要素がもともとあるため、自立に積極的になれないという問題。

エ 女性の自立を阻む仕組みが社会にあるだけでなく、女性自身が自立を求めても「女らしさ」が持つ矛盾に直面したり、「女らしさ」がないとされるため、自立をためらってしまうという問題。

オ 「女らしさ」を強しいる社会的な仕組みがあるだけでなく、女性は男性より経済力が弱く、「女らしさ」をどうしても優先してしまうため、自立を望んでいても躊躇ためらしてしまうという問題。

問2 ―線2「女になる」とあるが、それはどういうことか。【文章Ⅰ】に基づいた具体的な説明として適当なものには○を、適当でないものには×をそれぞれ書きなさい。

ア 女の子は他人に思いやりを持つと、周囲から評価されて、「女らしさ」を身につけるということ。

イ 女の子は自分の考えをしつかり主張すると、周囲から評価されて、「女らしさ」を身につけるということ。

ウ 女の子は人の話をよく聞き相手に従うと、周囲から評価されて、「女らしさ」を身につけるということ。

エ 女の子は多少の危険があっても屋外で遊ぶと、周囲から評価されて、「女らしさ」を身につけるということ。

オ 女の子はすぐに助けを求めず自分で問題を解決すると、周囲から評価されて、「女らしさ」を身につけるということ。

問3 ―線3「女らしさ」とあるが、これを考える際に注意する必要があると【文章Ⅰ】で指摘されているのは、どのようなことか。その説明として適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「女らしさ」は規範とはなっているが、女性たちはこれに従わなくてもよいということ。

イ 「女らしさ」として挙げられた特徴を持っていない女性が多くいるということ。

ウ 「女らしさ」として挙げられている特徴を全部持った女性はほとんどいないということ。

エ 「女らしさ」の特徴には、現実の女性たちを集団として見た場合の特徴とは異なるものが多くあるということ。

オ 「女らしさ」は女性のあるべき姿を人々に示すものになってしまっているということ。

問 4

——線 4 「言語における『女』と『男』というカテゴリーの非対称性」とあるが、それはどういうことか。このような「非対称性」が生じる理由を含めて 80 字以内で説明しなさい。ただし、「男性を表す言葉」・「女性を表す言葉」を必ず使うこと。また「解答らん」に「男性を表す言葉」・「女性を表す言葉」と書くとき、「」をつける必要はない。

【文章Ⅱ】 次の【文章Ⅱ】は、スヴェトラナ・アレクシエヴィチ著、三浦みどり訳『戦争は女の顔をしていない』の一部である。これは第二次世界大戦中ソビエト連邦がナチス・ドイツと戦った際に、ソビエト軍兵士として従軍した女性の証言である。これを読んで、後の問いに答えなさい。なお、出題に際して、本文には表記を一部変えたところがある。

【文章Ⅱ】

一九四五年の五月の日々。私たちはたくさん写真を撮ったよ。とても幸せだった。五月九日にはみんなが叫んでいた、「勝利だ、勝利だ」と。兵士たちは草の上を駆け回った……「勝ったあ!!!」足を踏みならしたりして踊り興じた。

空に向けて発砲する。それぞれが持っているもので……

誰が何を言っても聞こえていたのは、「勝利」の一言。そして、ふと、生きていたいと熱烈に思った。これからどんなにすてきな生活が始まるんだろう！写真を撮ってもらっておこうと思って、私は自分がもらった※褒章を全部身につけた。なぜか花をバックにして。どこかの花壇で撮ってもらったんだよ。

六月七日は幸せな日だった。あたしの結婚式。部隊では盛大に祝ってくれた。夫とはずっと前からの知り合いだった。大尉で中隊長だった。戦場で生き残れたら、戦争が終わってから結婚しようと誓い合っていたんだよ。一ヶ月の休暇をもらった……

あたしたちはイワノヴォ州のキニエシマに行った。彼の両親の所に。あたしはいつも英雄だったから、あんなふうに戦地にいた娘たちが迎ええられるって思っても見なかったんだよ。あんなにたくさんの戦場で、どれだけたくさんの母親たちの息子を、妻たちにはその夫を救ってやったかしかないのに。それが突然、侮辱の言葉を言われたんだよ。戦地では「看護婦さん」「大事な看護婦さん」という言葉しか聞いたことがなかったのに。あたしはめだたない娘ではなく、べっぴんさんだったんだよ。あたしは新しい制服を着ていったの。

夕方になってみんなでお茶を飲もうとテーブルについた時、彼のお母さんが台所へ息子を呼び出して泣いているの。「なんだ

って戦場の花嫁^{はなよめ}なんかを？ おまえは妹がまだ二人いるのに、もう貰^{もら}い手はないよ」今でもこの時のことを思い出すと泣きくなる。想像できるかい？ 私は大好きなレコードを持って行つた。大好きだったさ。「本当はしやれたハイヒールを履^はく資格だつてあるのよ」とレコードは歌っていた。戦地にいた娘たちのことさ。私がこれをかけたら、彼の姉が私の見ている前で、「あなたには何の資格もないわ」と割ってしまったんだよ。私の戦場の思い出の写真は全部捨てられてしまった。ねえ、あんた、これを説明する言葉もないよ……言葉がない……

その頃^{ころ}、軍人用の無料乗車証を使って食料を手に入れていた。私と夫はその無料乗車証を二人分合わせて品物に換^かえていた。特別の倉庫があつて、そこへ行くと、私たちは行列に並ぶ。私の順番が近づくと、店の奥^{おく}にいた男の人が売り台を飛び越えて私の前に来た。キスして、抱^だきしめて、叫^こんでいるの。「おい！ みんな見つけたぞ。あの人を見つけたぞ！ 見つけたかつたんだ、会いたかつたんだ。ほら、この人が僕^{ぼく}を救ってくれたんだ」夫は私のそばに立っている。その元傷病兵は私が戦火の中から救い出した人だつたんだよ。銃撃^{じゅうげき}をかいくぐつて。それで私を憶^{おぼ}えていてくれた。私？ 全員を憶えていることなんかできないよ。あまりにたくさんいて。ある時は車で、「看護婦さん……」って。私に気づいた人が泣きながら言う、「会つたら跪^{ひざまず}こうつて思つてた」と。その人は片足はなかつたよ……

2 戦地にいたことのある娘たちは大変だつたよ。戦後はまた別の戦いがあつた。それも恐^{おそ}ろしい戦いだった。男たちは私たちを置き去りにした。かばつてくれなかつた。戦地では違^{ちが}つた。這^はつて行く時、弾丸^{だんがん}や破片が飛んでくれば男たちが叫^こんでいた。「伏^ふせる」、でなければ覆^{おほ}い被^{かぶ}さつてくれた。身をもつて弾丸を受けてくれた。死んでしまつたり負傷したり。私は三回もそうやって救われたんだよ。

※褒章：戦場で果たした功績によって与^{あた}えられた勲章^{くんしょう}のこと。

問1 — 線1「私は自分がもらった褒章を全部身につけた」とあるが、「私」が戦争中に果たしていたのは、どのような任務か。これを「文章I」の「表3-1」に基づいて説明したものととして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 重い傷を負った兵士を戦場で助ける看護婦として「女性性スケール」の要素のすべてが求められる任務。
- イ 兵士を助けるため「女性性スケール」の要素と、戦場で活動するため「男性性スケール」の要素が求められる任務。
- ウ 看護婦ではあつても命の危険がある戦場で活動するため、「男性性スケール」の要素だけが求められる任務。
- エ たくさん兵士を助けるために「女性性スケール」の要素が求められ、「男性性スケール」の要素は必要とされない任務。
- オ 死と隣^{とな}り合わせの戦場で任務を果たすので、「女性性スケール」や「男性性スケール」の要素は一切必要とされない任務。

問2 ―線2「戦地にいたことのある娘たちは大変だったよ」とあるが、「私」にとっては、どのような「大変」なことがあったのか。これを「一」の【文章I】の内容に基づいて説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 戦場で危険な任務を何度も果たしていた時は、男たちが命がけで「私」を守ってくれたのに、戦場から帰ってくるとまわりの人々は「私」のことを無視しただけでなく、一般の女性からも「私」の戦場での功績を疑う言葉を投げかけられて辛かったということ。

イ 「私」は命の危険を冒して何度も任務を果たす中で「男らしく」なったため、戦争が終わると「男らしさ」を否定している一般の女性たちから攻撃されただけでなく、「私」は「女らしさ」を捨ててしまったため、男たちは攻撃される「私」をかばってくれなかったということ。

ウ 「私」は命の危険を冒し任務を果たすことで「男らしさ」を身につけていったものの、自分を助けようとした男性兵士が死んだり負傷したりすることが何度もあり、自分が助けた兵士と再会して感謝の言葉を聞かされても、「私」はそんな辛い記憶を忘れることができなかったということ。

エ 戦場で任務を必死に果たす中で「女らしさ」を捨てた「私」は、命を救った男性兵士から感謝の言葉をもらっても、「女らしさ」を回復できず、「女らしさ」を規範とする一般の女性たちからは「女らしく」するように責められただけでなく、男たちからも見捨てられたということ。

オ 「私」は戦場で任務を必死に果たすことで「男らしさ」を身につけたため、「女らしさ」を大切にしている一般の女性から異質な女性として否定されただけでなく、そんな「私」を男たちが助けてくれなかったことが、「女らしさ」を失わなかった「私」には辛かったということ。

二 次の文章は、浅田次郎『流人道中記』の最後の部分である。武士の青山玄蕃（文中では「俺」）は、上司である大出対馬守に罪を押しつけられ、蝦夷（北海道）松前藩への流罪となった。十九才の武士、石川乙次郎（文中では「僕」）は、護送役として玄蕃とともに津軽へ向かった。これを読んで、後の問いに答えなさい。なお、出題に際して、本文には省略および表記を一部変えたところがある。

それにしても江戸より二百幾十里、よくも歩いてきたものじやのう。叶うことなら※破廉恥な侍のまま、おぬしに斬られるなり蝦夷地に送られるなりしたかったが、※道中あれこれあつて檻樓が出てしもうた。

かくなるうへは、おぬしが得心ゆくよう語るべきは語っておこうと思う。

俺はのう、乙次郎。1 われら武士はその存在自体が理不尽であり、罪ですらあるうと思うたのだ。

よって、その理不尽と罪とを、背負って生きようと決めた。非道を暴くは簡単、ただ義に拠ればよい。まして※敵の屋敷に討ち入るは簡単、そのうへ腹切つて死ぬれば、あつぱれ武士の誉よとほめそやされるであらう。だが、それでは俺も※糞になる。

しからば、俺の選ぶ道はひとつしかない。武士という罪を、おのが身で償う。千年の武士の世のささやかな※贖罪とする。

青山玄蕃にしかできぬ決着はそれだ。

武士の本分とは何ぞや。

考えるまでもあるまい。それは戦だ。よって大坂の陣が終わり徳川の天下が定まり、※元和偃武が唱えられた折に、われら武士は変容せねばならなかった。

しかるに、戦国の世を勝ち抜いて幕府を開かれた権現様も、その跡を襲られた台徳院様も、そもそもは天下の政とは無縁の武将にあらせられた。よって太平の世は力づくに保たれるものと信じておられた。

そうして、政を担う武士の道徳は戦国のまま硬直した。御歴代様の遺徳を蒙って二百六十年もの間、戦をせずにすんだというに、今もこうして大小の二本差しを捨てられぬ。変革を忌避し、万事を先例に倣い続けた末、甚だ理屈に合わぬ儀礼と慣習で身を鎧った、奇怪な武士が出来上がった。さような化物は存在そのものが罪だ。

たちの悪いことに、そうした武士は権威なのだ。御大名から足輕まで、貧富のちがいはあっても権威であることに変わりはない。そしてその身分は「家」によって保たれる。

なにゆえに。それは血で血を洗う戦国の世には、信じられる者が血族ばかりであったからだ。あるいは、代々が忠節を尽くして裏切らぬ、譜代の家柄であつたからだ。われらを縛めている道徳ばかりではなく、こうした「家」の尊厳についても、戦国のまま硬直してしもうた。

武士に生まれついた者は、けつしてかような疑問は抱くまい。おぬしも同様であろう。だが、幸い素町人からふいに武士となった俺は、疑うことができた。俺の人生を捻じ曲げ、かくも苦勞を強いる「武士」とは何か、「家」とは何か、と。

考えてもみよ、乙次郎。

おぬしの父母も兄も弟妹も、みなその犠牲者ではないのか。婿入り先の父母も、幼いまま妻となった人も。武士である限り、家がある限り、この苦悩は続く。すなわち、武士はその存在自体が罪なのだ。

大出対馬守は敵ではなく、※罪障であつた。しからば俺は、憎む前に憐れまねばなるまい。よつて、同じ武士としてその罪障を背負い、武士道という幻想を否定し、青山の家を破却すると決めた。青山玄蕃の決着だ。

A 浜道は砂から細石に変わり、やがて波に磨かれた石くれとなった。歩きづらはこのうえなく、僕は流木を杖にしてよるめきながら進んだ。

風はいよいよ冷たく、雲は空一面を低く蓋い、海は黝んでいた。この浜と海の涯てに福山の御城下があるなどと、聞いたと

ころで誰が信じよう。むしろ玄蕃が言つた通り、僕らはすでに死んでいて、死出の旅路をたどっているのかもしれない。

玄蕃の語るところは腑に落ちた。僕も武士というおのれの看板に懷疑していたから。それでも僕は、そうした僕自身の苦悩を、鉄炮足輕の家に生まれたがゆえの僻みだと思つていた。だが、食うに困らぬ御旗本も、やはり懷疑していたのだ。

むろん、貧しさを知らぬ武士は疑いを抱くまいが。

物思いつつ歩いてるうちに置き去られてしまった。遙か先で玄蕃が「おおい」と手を振つた。

「やい、乙次郎。ここまで来て音を上げたか。オーイ、舟が出るぞえ」

2 僕は気付いた。玄蕃のうちは一助と捨松が棲んでいる。

それは※悲しい話にはちがいないが、もし青山玄蕃という快傑の最もすぐれた点をひとつ挙げるとするなら、剣の腕前でも学識でもなく、一助と捨松とともに忘れずにおのが根としたことだと思う。そればかりは、誰も真似ができないから。

まさか音を上げたわけではない。訊きたいことは山ほどあるが、僕は僕の務めを怠つてはならなかった。玄蕃は流人で、僕は※押送人なのだ。そう思い定めれば、B 足は棒切れのように固まり、体が石のように重くなった。

磯場を巡った岬に岩屋があり、赤い小さな祠に観音様が祀られていた。

「何を願つたのだ」

並んで掌を合わせたあと、僕は訊ねた。

「あんたが無事に帰れますよう、南無観世音、ナム、ナム」

「まじめに答えてくれ」

玄蕃の顔からあどけない一助が去り、捨松が現われた。

「乙次郎。ひとこと言うておく」

合掌をほどこいて、観音様の祠を真向に見つめながら玄蕃は言つた。

「3 おのれに近き者から目をかけるはあやまりぞ。武士ならば男ならば、おのれのことは一の次ぞ。まして大身の旗本ならば、妻子のこととて二の次ぞ」

僕は心打たれた。その気構えのあつたればこそ、武士は権威なのだ。むろん胸のうちに嵐はあろうけれど、玄蕃は毅然として信ずるところを僕に告げた。この人は破廉恥漢ではない。そうと見せておのが身を、千年の武士の世の※贅としたのだ。

それから僕は物も言わずに、海峡の波がからからと石を研ぐ浜辺をひたすら歩いた。いくつもの難所を越して岬に立ったとき、海と空の究まる彼方に、蝦夷の山なみが見えた。

「乙次郎。俺は※勝手をしたか」

いや、と言いかけたが声にはならなかった。僕は黙って彼岸を眺めていた。思うところの何ひとつとして言葉にならぬおのれの幼さに、僕は※毗を決したまま泣いた。父を送る子と同じように。

海の面を霧が寄せてきた。僕ははしばらくの間、時も場所もわからぬ浜道を、寄する波音だけを頼りに歩いた。

ときおり C 白い鷗や黒い鵜が、鰯の群でも見つけたのであろうか、鳴き騒ぎながら目の前をよぎった。海のほかには何もないところに来てしまった。

磯場をめぐり、峠道をたどり、僕はひたすら歩み続けた。

「あんた、ひとりで帰れるかえ」

子供の足を気遣うように玄蕃が言った。僕は答えられずに肯いた。

浜道はやがて陸に上がり、海風に撓んだ松並木に変わった。旅の終わりを僕は悟った。霧の中に杣形の木柵が見えた。

「乙次郎やい」

「はい」

「存外のこと、苦労は人を磨かぬぞえ。むしろ人を小さくする」

やはり言葉にできぬまま、僕はかぶりを振って否んだ。

…〈中略〉…

浜辺にそそり立つ奇岩の先に小さな船着場があり、潮風に撓んだ松林のほとりに蝦夷福山の陣屋があつた。しかし霧の中にぼんやりと佇むそれは、松前侯の参勤が五年に一度ゆえであらうか、陣屋と呼ぶにはあまりにわびしくて、どうかすると気の利いた浜茶屋に見えた。

二百幾十里の涯ての終いの※一丁が、どうしてもたどり着けぬ隔りに感じられた。僕は D 浜茄子の赤い花を蹴散らし、石く

れを踏みたがえながらよろめき歩んだ。

陣屋の前には松前様の御家来衆が、幾人かぼんやりと佇んでいた。潮がよいのだろうか、石を積んだ棧橋には帆を下ろした舟が待っていた。これで海峡を渡るつもりかと、怪しむほど小さな舟だった。

「ここぞよい。苦労であつた」

立ち塞がるようにして玄蕃は言った。取り乱す僕を見兼ねたにちがいがなかった。

「いいえ、玄蕃様——」

※初めて名を呼んだ。僕にとってのこの人は、けっして流人ではない。立ちこめる霧を腹一杯に吸いこんでから、僕は陣屋に向かつて進み出た。

「※新御番士青山玄蕃頭様、ただいまご着到にござる。くれぐれも御無礼なきよう、松前伊豆守様御許福山御城下まで御案内下されよ」

僕は踵を返して歩き出した。4 すれちがう一瞬、玄蕃はにっかりとほえんだ。

餞の言葉は要らない。鷗の声と寄する波音を聴きながら、僕は真ツ白な霧の帳を押し開けた。

※破廉恥：恥知らず。ここでは、玄蕃が罪を犯した^{おか}こと、および切腹を申しつけられたがそれを拒んだ^{こは}ことを指す。

※道中：檻樓が出てしもうた：江戸から津軽に向かうおよそ一ヶ月にわたる道中で、玄蕃が事情を抱えた人々を救うのを、乙次郎に見られてしまったことを指す。

※敵の屋敷に討ち入る：玄蕃の妻や家来は、玄蕃に罪を押しつけた大出対馬守の屋敷に討ち入ろうとしたが、玄蕃がそれを制止した。

※糞：玄蕃の罪は大出対馬守から押しつけられたものだったため、玄蕃は大出対馬守のことを「糞野郎」と言っていた。

※贖罪：罪を償うこと。罪滅^{ほろ}ぼし。

※元和偃武：戦乱の世の中が平和になったこと。

※罪障：自分の目的を果たそうとするときに妨げとなるもの。

※悲しい話：玄蕃は町人の家に生まれたが、幼いころに生母を亡くし、武家の家の養子となった。しかし継母は実の子ではない玄蕃のことを疎んじて、生母が付けた「一助」という名前では呼ばず、「捨松」と名付けた。

※押送人：護送人。

※贅：いけにえ。

※勝手：道中で乙次郎が制するにもかかわらず何度も人助けをしたことを指す。

※毗を決したまま：目を大きく見開いたまま。怒ったり決意したりする様子。

※一丁：約一〇九メートル。

※初めて名を呼んだ：乙次郎は、自分よりはるかに身分が高い玄蕃を呼び捨てにすることができず、かといって罪人である玄蕃に「様」や「殿」を付けて呼ぶのもおかしいので、今まで名を呼んだことはなかった。

※新御番士青山玄蕃頭様：「新御番士」は将軍が外出する際の先導役。玄蕃は江戸ではその「頭」を務めていた。

問1——線1「われら武士はその存在自体が理不尽であり、罪ですらある」とあるが、玄蕃がこのように考える根拠として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 戦国の世が終わって二百六十年も経過しているにもかかわらず、戦を本分とする道徳を捨てようとせず、武士やその家族は時代遅れの儀礼と慣習に縛られていること。また、その武士が「家」を背景にして権威を持っていること。

イ 戦国時代では、血族が同じ主君に忠誠を誓う家柄しか信じられず、それらの人々は強い結束力がある反面、武士自身やその家族に自己犠牲を強いることになること。また、そうであるにもかかわらず武士に権力は与えられていないこと。

ウ 他人の非道を暴き、敵討ちをし、その責任を取って切腹するのが武士の誉れだと考える人はもういないのに、いまだに従来の武士らしさを捨てられないこと。また、そのような状況を変えようとする「家」が取りつぶされてしまうこと。

エ 町人であれば「武士」や「家」という存在を疑うこともできるが、武士は自分たちの尊厳を守ることにこだわり続け、武士という存在について疑うことができないこと。また、武士自身が権威を持っていることに気付いていないこと。

オ 武士である以上、戦がなくなっても大小二本の刀を常に腰に差していなければならず、そのせいで時代に合わない奇怪な姿をした化物になってしまったこと。また、そのために武士が持っていた権威そのものも低下しつつあること。

問2

——線2「僕は気付いた」とあるが、乙次郎はどのようなことに気づいたのか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 玄蕃は「武士」や「家」について疑問を持ったが、それは、玄蕃が他の武士には持ち得ない「町人」としての誇り^{ほこ}を持っているからであり、その根底には、母親から愛情を受けて育てられた「一助」時代の楽しい思い出と、養子として迎^{むか}えられ継母に冷たくされた「捨松」時代の辛い思い出の両方があるということ。

イ 玄蕃は「武士」や「家」について疑問を持ったが、それは、玄蕃が武士の道德に対して他の人には持ち得ない客観的な視点を持っているからであり、その根底には、「家」や「武士」の道德に縛られなかった「一助」時代の町人の感覚と、武家に養子入りした後に身につけた「捨松」時代の武士の価値観の両方があるということ。

ウ 玄蕃は「武士」や「家」について疑問を持ったが、それは、玄蕃が他の武士が持っていないすぐれた金銭感覚を持っているからであり、その根底には、武士の息子^{むすこ}となつて何不自由ない「捨松」時代を経験する前に、町人の息子として貧しい生活をした「一助」時代の経験があるということ。

エ 玄蕃は「武士」や「家」について疑問を持ったが、それは、玄蕃が他の人よりも高いレベルで剣術や学問を身につけているからであり、その根底には、町人であつた「一助」時代には学べなかつた剣術や学問を、武士の養子である「捨松」になつてから地道に身につけるといふ辛抱強^{しんぼう}さがあるということ。

オ 玄蕃は「武士」や「家」について疑問を持ったが、それは、玄蕃が武士の道德観に対して他の武士が持ち得ない冷静な判断力を持っているからであり、その根底には、武家の養子になり「捨松」と名前を変えた後も、町人の息子であつた「一助」時代の道德観を活かして生きていた経験があるということ。

問3

——線3「おのれに近き者から目をかけるはあやまりぞ。武士ならば男ならば、おのれのこととは二の次ぞ。まして大身の旗本ならば、妻子のこととて二の次ぞ」とあるが、この言葉から乙次郎は玄蕃をどのような人物だと理解したのか。70字以内で説明しなさい。

問4

次のア～オは、この小説全体を読んだ生徒たちの、——線4「すれちがう一瞬、玄蕃はにっかりとほえんだ」についての発言である。——線4に関する発言として**適当でないもの**を次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 生徒A

押しつけられた罪を受け入れ、贖罪として、武士道という幻想を否定し青山の家を破却する、という玄蕃の考えを聞いた乙次郎は、最後の場面で堂々と口上を述べたよね。玄蕃はそれを聞いて、自分の本当の気持ちを乙次郎が理解してくれているとわかって、うれしくなったんじゃないかな。

イ 生徒B

乙次郎はおよそ一ヶ月におよぶ旅の途中とちゅうで玄蕃がさんざん勝手な行いをしてきたことに対してかなり腹を立てていたはずだから、最後の最後に玄蕃の考えを聞いたくらいでその怒りいかが消えるとは思えないな。玄蕃は、乙次郎が自分と別れられるのを内心喜んでいるのをわかっていて、「やっと俺と別れられるな、嬉しいだろ」という思いで乙次郎に笑いかけたんじゃない？

ウ 生徒C

乙次郎がわざわざ松前藩の家来衆に「新御番士青山玄蕃頭様」と罪人になる前の玄蕃の正式な役職名を述べて、さらに「くれぐれも御無礼なきよう、御案内下されよ」と付け加えたのは、玄蕃を憎く思いながらも、押送人としての仕事だけは立派に果たそうと思ったからなんだね。そんな乙次郎を見た玄蕃には、「最後だけは立派な仕事をしているフリをするじゃねえか」という、冷やかしの思いもあったんだろうね。

エ 生徒D

「おのれの幼さに、僕は毗を決したまま泣いた。父を送る子と同じように。」って書いてあるから、乙次郎は、肉親に対する感情に似たものを玄蕃に対して持つようになったと思う。逆に玄蕃からすると、乙次郎がだんだん息子に近い存在になっていったんじゃない？ 子どもを気遣うように「あんた、ひとりで帰れるかえ」と聞いたり、乙次郎が別れの際に子どものように取り乱すのではないかと心配して「ここぞよい」と言ったりしたのも、みんな、父親のような目で乙次郎を気遣っていることの表れだと思うんだ。

オ 生徒E

乙次郎は玄蕃のことを最後は立派な武士として尊敬していたと思う。玄蕃が旅の途中で何度も人々を救うのを見ているし、乙次郎は玄蕃から武士のあり方についてまだまだ「訊きたいことは山ほどある」と思っているしね。玄蕃が切腹を拒んだのには深い考えがあったからだとしたことにも、乙次郎は最後に気付いたんだよ。だから乙次郎の丁寧な口上は、「この方を丁重あつかに扱ってくれ」という思いの表れなんだと思うんだ。玄蕃にはそれがわかったから、「にっかりとほえんだ」んだと思う。

問5 本文について説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ――線A「浜道は砂から細石に変わり、やがて波に磨かれた石くれとなった」という表現からは、長い旅が続いている二人の疲労がたまっていた結果、二人の精神状態も穏やかでなくなってきたことがうかがえる。

イ ――線B「足は棒切れのように固まり、体が石のように重くなった」という表現は、玄蕃を罪人として護送するという自分の仕事に対して積極的になれない、乙次郎の沈んだ気持ちを表している。

ウ ――線C「白い鷗や黒い鶉」という表現は、思いどおり自由に飛び回る鳥の様子と、玄蕃と乙次郎が視界の悪いなか歩きにくい道を苦勞して進む様子を、対照的に表している。

エ ――線D「浜茄子の赤い花を蹴散らし」という表現からは、乙次郎の、美しい花をも蹴散らしたくなるほどのやりきれなさ、江戸から津軽までの長い距離を歩き通した辛さの両方を読み取ることができる。

オ この文章は、順番に、玄蕃、乙次郎、作者の視点で描かれているため、二人の考え方が読者によくわかるだけでなく、その二人を読者が客観的に眺めることができるように工夫されている。

三 次各文の――線のカタカナを漢字に直しなさい。

- 1 スポーツのサイテンが四年ぶりに開催された。
- 2 各国のシュノウが集まる会議。
- 3 地域のデンショウについて調べる。
- 4 懷中デントウをつける。
- 5 セイコウ雨読の生活を送る。
- 6 雑誌のソウカン号を手に入れる。
- 7 偉人たちのザユウの銘について調べる。
- 8 子どものニュウシが抜けた。

問題は、これで終わりです。

